心に余裕がなければスムーズな会話ができない

五十嵐
いよいよ官庁訪問についてお聞きします（一同「出たか!」笑）。最終合格しても半分以上の人がふるい落とされる厳しい関門ですが、内定の決め手となったのは何だったでしょうか。

永倉
私は直前まで受かると思っていなかったので、準備が確実に足りなかったです。省庁に関する情報収集もせず、志望動機も自己PRも文章化しないままでいきなり本番に臨みました。そのため厚労省では少子化や年金についてたずねられた時に支離滅裂な答えになってしまい、面接官から「分からないのでもう一度」と言われました。後で聞くと、「自分で考えてその場で発言できるか」ということを面接官は見ていたそうで、自分なりの視点を持って話していたことが好印象だったと言ってもらえました。周りで受かった人から聞いても、しっかり答えを言えたというよりはその場で考えて会話を楽しめたという人が多かったです。

五十嵐
内定の決め手となったのは何だったのでしょうか?

永倉
人事の方からは「キャラだよ」と言われました（一同笑）。考える姿勢を持っているから今後伸びしろがあるというように評価していただけたようです。面接ではなく会話のつもりで臨んだのも良かったのかもしれません。2回目以降の面接では、複数の面接官から「緊張していないね」と言われました。

山﨑
私は、控室で仲良くなった人で落ちている人、いないんですよ。みんな控室でも笑いながら会話できる人たちでした。落ちていく人は控室でガチガチになって「あと○人落ちる…」というようなことばかり気にしている人でした。「待ち時間が長い」と愚痴を言う人も多いのですが、私は周りの人たちと楽しく話しているうちにあっという間に過ぎていく感じでした。

五十嵐
余裕ですね。訪問期間中、辛かったり苦しかったことはなかったのですか?

山﨑
もちろん、面接の最中は自分の考え方が甘いことを思い知らされて悔しい思いをすることが毎回ありました。内閣府の1日目の最後には「君はもっと、国がなぜこれをやっているのか、なぜこれをやっていないのか、新聞を読んで良く考えて来てください。私たちは成長を見ています」と言われました。毎回、相手の言ったことを真剣に受け止めて、自分の考えを再構成して次の面接に臨みました。それができるかどうかが合否の分かれ目なのではないでしょうか。

渋谷
私は法務省保護局だけ回ったのですが、国Ⅰが第1志望ではなかったので志望動機も固まっていませんでしたし、動機に結び付く自分の活動実績もありませんでした。そこで最初の説明会では、他の人よりも積極的に質問しました。実質的な面接は15分のが2回だけだったのですが、世の中の不条理さについて考えを求められたり、会話のような雰囲気でした。私はただ考えていることをその場で一生懸命答えただけなのですが、面接官は満足そうにうなずいてくれて、後で「ハキハキしている」「政策立案に向いている」と評価してくれました。自分としては最後まで、何を見てどこを評価しているのかよく分かりませんでした。

井澤

僕はぎりぎりの成績で通ったので、官庁訪問できるのがラッキーで、とりあえずここにいることを楽しもうという感じで臨みました。私も渋谷さんと同じ法務省保護局だったのですが、本当に何を見ているのか分からないぐらい短い面接でした。内定した後に言われたのは、大学時代のBBS活動（注：非行少年の更生を援助するボランティア団体）等のいろんな活動実績やさまざまな趣味など「視野の広さ」を評価したと言われました。あとは「話しやすい」「話していて飽きない」と言われました。法律職の他の内定者2人を見ても感じるのは、保護に向いている雰囲気、個性のようなものがあるのかなと思います。

石田
僕は原課面接（注：人事課以外の各課の担当者との面接）ですごく苦労しました。ほかの人も言っているようにいかに楽しく会話できるかがポイントなのに、初対面の時に緊張するほうなのでうまく会話になりませんでした。
内定の決め手になったと思うのは最後に残されたグループディスカッションで司会役をやったことです。自分の意見を言わず、他人の意見をよく聞いて整理したうえで次の議論を促すというやり方を心がけました。塾の練習会で指導を受けたおかげです。後で「素晴らしい司会だった」と評価されました。

岩宮
僕は終始楽しんでいました。心にゆとりを持つことが大事だと思います。官庁訪問ではトランプを持ち歩いて、待合室でたまたま出会った人と遊んでいました。面接中も自分の話はほとんどせずに、次々に質問しては向こうの話を聞いて勉強させてもらう態度でした。そして分からないことは分からないと認めるなど、何でも思ったことを素直に話し、飾らないようにしました。自分をアピールする姿勢がまったくなかったのに採用してもらえた理由は、たぶん人柄やコミュニケーション能力が評価されたのだと思います。面接官からは「君は外見が爽やかだけれども、結論も爽やかだね」と言われました。

五十嵐
最初からそんなにリラックスして話すことができたのですか?

岩宮
いえ、違います。模擬面接では正確な言葉遣いを気にするあまり、自分の良さを出せずに五十嵐先生から「硬いよ」と指摘されました。それがきっかけで、きちんとすることよりも自分の良さである素直さを出すことが大切だと思い、考えを変えました。待ち時間中に準備したノートを見たりすると、面接中も思い出そうとして会話がうまく行かなくなります。ですから待ち時間中はあえて頭の中を0にして、「人を笑わせよう、ニコニコしよう、その状態で面接に臨もう」と心がけていました。

五十嵐
政策研究には力を入れなかったのですか?

岩宮
待合室で話していて、「知識がすごくあるな、頭がいいな」と思う人は